

氏 名 林 耕次

学位（専攻分野） 博士（理学）

学位記番号 総研大甲第 1080 号

学位授与の日付 平成 19 年 3 月 23 日

学位授与の要件 先導科学研究科 生命体科学専攻
学位規則第 6 条第 3 項該当

学位論文題目 カメルーン南東部におけるバカ・ピグミーの狩猟活動に関する生態人類学的研究

論文審査委員 主 査 助教授 池谷 和信
客員教授 秋道 智彌
教授 颯田 葉子
教授 佐藤 弘明（浜松医科大学）

論文内容の要旨

本論文は、カメルーン南東部における狩猟採集民バカ・ピグミー（以下、バカと表記）の狩猟活動を中心に、採集、漁撈、および農耕などの生業活動の記述と分析を通じて、狩猟活動の意義を考察するものである。バカが定住したピグミーという点に注目し、定住生活との関わりに言及しながら、狩猟活動の実態を検討する。

第1章では、本研究における問題の所在をふまえて、調査対象をめぐる背景を研究の視座として提示した。これまで、アフリカ熱帯雨林におけるピグミー系狩猟採集民を対象とした生業研究の多くでは、森での狩猟採集活動をとまなう遊動生活が注目されてきた。本論文で示すバカの定住生活では、近隣の農耕民とほぼ同様の造りである土壁の家屋で暮らし、主体的に集落の周辺に農作物の畑を開いた生活様式と定義しているが、こうした定住生活とピグミーの生業活動についての関係は十分に論じられてこなかった。本研究のもととなる調査は、カメルーン南東部のN村周辺をおもな対象として、2001年2月から7月と2002年2月から6月まで行ったものが中心である。また、1998年8月から1999年6月に行った調査内容と合わせて、合計約18ヶ月の調査資料に基づいている。一次資料は、参与観察で得た定量的資料と、バカ語を主とした聞き取りで得た資料である。

第2章では、調査地周辺の概要と民族構成についての概略を記した。調査の対象地域はコンゴ共和国との国境をなす河川に隣接しており、バカを含めた各種民族の行き来が盛んである。また、周囲の森林は、熱帯雨林気候帯に属した半落葉性樹林と常緑樹林の混交林でおもに構成されている。調査地の行政村であるN村では、1973年から1982年にかけて伐採会社が操業していたことで、その前後には幹線道路が通じていた。その後、2001年以降は、一部通行不可能であった幹線道路が再び開通し、外部社会とのアクセスが容易になった。また、従来の生業活動である自給作物の栽培、狩猟、採集、漁撈に加えて、換金作物として1980年代の中頃からカカオ栽培が盛んとなり、以後プランテーション経営を含めた周辺地域でのカカオ栽培が継続している。このように、バカを含めた複数の民族の共存と、伐採会社の操業やカカオ栽培の活性化に伴う歴史的な経緯に基づき、調査地域の生業形態が変容しながら今日に至る背景を示した。

第3章では、定住集落におけるバカの生業活動の記述と分析を行い、とくに季節性に基づいた生業内容の特徴を検討した。バカの狩猟活動は、他のピグミー系集団と異なり、ほぼ罾猟と銃猟によってのみ実践されている。定住集落を拠点とした狩猟活動では、一部の人々によって、ほぼ半日での行き来が可能な範囲で狩猟が行われているのが実状である。定住集落にいるあいだのバカの生業は、農耕活動が中心であると指摘できる。その取り組み方については、伐開と作付けの状況から検討すると、開墾面積の違いや取り組み方の積極性に個人差が生じていることが指摘できる。また、バカの約三分の一の世帯が行っているカカオ栽培と、主に若年層のバカが従事する近隣の農耕民を通じたプランテーションで

の賃労働の状況をふまえ、市場経済に関係している状況を示した。

第4章では、おもに乾季に実施される森林での狩猟採集キャンプの様子に注目して、キャンプの形態、生業複合のあり方、および従事者の活動内容について分析を行った。森林のキャンプでは、定住集落における集団構成とは異なり、時として複数の集落から成る血縁者同士の結びつきが強い集団で構成される傾向がある。これは、これまでのピグミー系狩猟採集民の事例にも示されているような、バンド社会としての性格が維持されている。ただし、バカが行う中心的な狩猟である畏猟と銃猟は、その性質上、男性主体の個人猟であり、狩猟活動を伴うキャンプ生活では男性が主体となって構成される。キャンプの形態については二つの類型を示した。一ヶ所のキャンプに定着して、時として農作物の補給を目的とした集落との行き来を繰り返しながら滞在を続ける形態は、定住生活に依存した事例であると指摘した。他方で、バカ語でモロンゴ (*molongo*) と呼ばれる長期移動型の狩猟採集キャンプでは、現在では稀にしか実施されないものの、狩猟のほかにも野生ヤム採集や漁撈による食物獲得を前提とした形態であり、森の食糧資源に強く依存した事例である。モロンゴは、森林での行動範囲がより広範であり、季節性や動植物の生態に熟知した人びとによって成り立つ活動であることもふまえて、バカに特徴的な事象と指摘した。

第5章では、バカの狩猟活動におけるゾウ狩猟の実態と、その中心的な従事者であるトゥーマ (*tuma*) について、銃猟という狩猟形態の特性と大型の狩猟対象であるゾウの特性に注目しながら考察した。バカは、ゾウ狩猟に銃を用いるために、銃の所有者である周辺民族との関係が不可欠となる。また、ゾウは捕獲後に大量の肉をもたらすため、狩猟採集民として特徴的な分配行動が、畏猟や他の動物を対象とした銃猟に比べて顕在化している。他方で、ゾウは狩猟規制の対象種であり、密猟としての違法性を含むことも事実である。この問題に対して本研究では、バカの慣習に基づく生存狩猟としての可能性を示した。すなわち、バカによるゾウ狩猟の実践内容とともに、肉の分配にみられる慣習のほか、物質文化や言語、儀礼や食物禁忌といった点で、バカにとってのゾウとゾウ狩猟に関しては、多彩な民俗知識がいまなお継承され、バカの文化に欠かせない要素であることを指摘した。

第6章では、これまでの議論を総括して結論を述べた。バカによる狩猟活動は、定住集落と森林キャンプにおける狩猟機会や狩猟成果の点で、個人差や特殊化が生じていることを明らかにした。それは、農耕活動を含めた定住生活の影響が大きいものの、バカ同士や近隣の農耕民との関係を通じて、現在のバカをとりまく社会において形成された生計戦略であるという結論を導いた。また、バカの狩猟技術である畏猟や銃猟は、個人的性質の強い狩猟方法であり、定住と農耕生活を受容したバカにとっては都合が良く、現在の状況を促進させる要因になったと指摘した。狩猟の従事者に関しては、ゾウ狩猟で顕著なように、バカにはトゥーマに代表される特化した狩猟従事者がみられるものの、彼らが担う役割は、いまなおバカの文化や慣習において重要な意味を含み、社会的にもバカ社会の内外において、紐帯としての機能を果たしていると位置づけた。

以上のように本論文では、バカは定住生活と農耕活動を受容しつつも、ピグミー系狩猟採集民として特徴的な森林での狩猟活動を実践し、バカ社会内部と近隣の民族との社会関係のうえで成り立っていることを明らかにした。本研究の特徴は、バカの農耕活動や森林でのキャンプ生活における社会経済的な要因に加え、狩猟規制などの政治的な背景で森林での狩猟採集活動が厳しくなる状況下において、今日の狩猟活動の意義を問い直す点である。また、アフリカ熱帯地域における狩猟採集民研究としては、狩猟活動の実践を通じて、当該社会における市場経済や社会政治的な状況をふくめた議論を展開し、現代の狩猟採集民のあり方について新たな視点を提示するものである。

論文の審査結果の要旨

アフリカのピグミー系狩猟採集民における狩猟活動を対象にした生態人類学的研究では、弓矢猟、網猟、槍猟などの伝統的な狩猟が注目されてきた。また、その研究枠組みでは、外部社会との関係をあまり重視することなく、狩猟活動のみに対象が限定されて研究されてきた。本博士論文は、カメルーンにおけるバカ・ピグミーの狩猟活動のなかで、近年導入された罾猟と銃猟に注目した生態人類学的な研究である。狩猟をめぐる政治経済的背景や狩猟のみならず狩猟と農耕とのかかわりに注目することを通して、定住化を受容したバカにおける狩猟の実際と生活の中における狩猟の意義を把握している。論文は、序論、調査地の概要につづいて、3つの章が本論を構成する。

まず序論では、ピグミー系狩猟採集民の生業に関わる研究が展望され、狩猟と農耕との関係に言及した研究やゾウを対象にした銃猟に関する研究が乏しいことが指摘される。また本論文は、1年以上にわたるバカ語を使用しての現地調査、なかでも狩猟への参与観察によって得られた資料を中心として論が組み立てられている点が特徴とされる。

次に、第3章の「バカ・ピグミーの生活」では、定住集落におけるバカの生業活動について、季節性に注目しながら記述・分析される。ここでは、焼畑農耕が生業の中心であると同時に、その跡地でのカカオ栽培の重要性が指摘される。世帯別の農地面積、年齢層によるその面積の大きさの違い、畑の労働をめぐる隣接する民族との関係が、定量的なデータをもとに分析される。

第4章の「森のキャンプにおける狩猟活動」では、主に乾季の森林における狩猟採集キャンプを対象として、狩猟を中心とした生業複合全体が記述・分析されている。森林のキャンプでは、定住集落の構成とは異なり、血縁集団であることが多い点、狩猟については、罾猟と銃猟の捕獲率が計測され、住民内部での依存する狩猟法が異なるという新たな指摘がなされている。

第5章の「ゾウ狩猟の実践と狩猟従事者の意義」では、「トゥーマ」という狩猟熟練者に注目して、ゾウ狩猟の実際および肉の分配行動が詳細に記述される。そのなかでは、バカが狩猟用の銃の所有者である周辺民族と密接に結びついており、象牙は銃の所有者のものになるものの肉はピグミー内で消費される点など、注目に値する知見である。

以上のように、本博士論文には、バカ・ピグミーの狩猟や農耕活動および両者の関係について多数の重要な新知見が盛り込まれており、本論文は博士（学術）に十分に値するものである。なお、本論文の第4章に相当する部分は、申請者の単著による英語論文として、アフリカ研究の分野における国際学術誌 *African Study Monographs* に掲載が予定されている。